臨床青年心理学研究（VI）

――7年間にわたった登校拒否と家庭内暴力を克服した青年――

池田博和　間宮正幸[1)]　生越達美[2)]

I　はじめに

今日，わが国の青少年に関する諸問題の中でも，ことに登校拒否や家庭内暴力の問題は，その解決が焦眉の急とされている。われわれは第II報よりこの課題にとりくみ，いくつかの考察を加えてきたが，本論においても，長期にわたる登校拒否状態を示した一症例を掲げ，その発症の背景，症状のもつ臨床青年心理学的な意味とともに有効な治療的接近のあり方などについて検討していきたいと思う。この症例においては，さらに家庭内暴力と軍国主義，青年期と性といったミクロとマクロ両面の問題が交錯して示されているが，これらの問題について，臨床的視点から青年期をみるというわれわれの基本的な立場からの考察を行っていくことにしたい。

症例の報告は，間宮が分担し，それに池田，生越がそれぞれ独立に論評を加えることにする。なお，この症例は，間宮が臨床家になる以前，大学を卒業して進学のための準備をしている期間に，いわば臨床的家庭教師としての要請をうけてかかわった事例である。この点，臨床事例としては，少々特殊なケースであるが，上に述べたわれわれの立場からみて，多くの示唆に富むと思われるので，あえて提起するものである。

II　症　例

症例：光男（仮名）相談時16歳男子

1. 問題の発生と経過

ある地方都市の公立小学校に通っていた光男の成績が良好なるのを見込んだ両親は，彼を将来，防衛大学に入学させたいと考えて，5年進級を機に某国立大学附属小学校に転校させた。その結果，光男は学級や地域の子ども集団から孤立してしまうことになり，成績も急激に低下して，その5月からは登校拒否が始まったのであった。

両親は市の教育センターに相談し，登校拒否児として治療的援助を受けるところとなった。両親は威圧することで当初は登校を促すことができていたが，附属中学へ進んでも不登校は続き，情緒障害児短期治療施設へ3カ月間の予定で入所することになる。しかし，その入所期間に一再ならず〝脱走〟して問題を悪化させたため，両親は光男を出身地の東京の某中学へ転校させた。彼は伯父の家に寄留して通学することになったが，やはりうまく適応できず，地元の学区の公立中学校へ再び転校し，登校拒否症状をくり返しつつ，所定の出席日数不足のまま220人中150番の成績で卒業した。その後，父親の「裏口入学工作」によって某私立高校商業科へ入学。しかし，入学後も父親による強制的な柔道部配属を嫌い，それを理由として登校拒否をくり返した。結局，出席日数の不足と成績不良の理由で留年が決定。そこで，すぐに他の私立高校の転入試験を受けたが，合格できず，その頃から母親，妹らへのひどい暴力行為が始まった。

留年後は1カ月程，新1年生と共に通学したが，ささいなトラブルからまた不登校を決めこみ，母親や妹に乱暴を働き，父親と大格闘を演じて流血騒ぎを起こし自室に閉じ込もりきりになった。

2. 家族構成

父親は昭和元年生まれで，生家は職業軍人の家柄であり，祖父は陸軍軍人であった。父親もまた海軍兵学校を卒業したが，卒業と同時に終戦を迎えたために，旧制の一流大学に入りなおしている。この人は文字通りの「旧日本帝国軍人」という風貌を十分に携えている人で，中背の，脂ぎった丸みをおびた鼻の大きい顔と，壮年期を終わるにふさわしい腹部の張りが，成功した中小企業の社長としての肩書きをより似つかわしいものにしている。

母親は父親より10歳年下であり，いわゆる「お嬢さん女学校」として有名な某女学校を卒業している。若い時には，地域一の美人であったといい，その面影は今でも

(1) みなみ子ども診療所発達相談室
(2) 名古屋学院大学

充分残されていた。現在は夫と会社の経営を共にしながら，家庭の運営をひとりできりもりしている。彼女は精神的葛藤があると胃痛をおこし，胃腸薬をしばしば服用する。

上の妹は，光男とは年子で高校1年生。成績は思わしくなく，私立高校被服科に在籍している。バスケット部員として活動する他には，目立った印象を与えず，光男とは最も距離がある。次妹るり子（仮名）は，光男と7歳ちがいの小学校5年生であり，成績は中の上，小ぶとりの体格や神経質そうな性格という点で光男と似た同胞である。

他は犬のクロ一匹，雑種の比較的大きな犬である。この犬だけが家族すべてによってそれぞれに愛されていた。

3. 生育歴

母親は国民小学校時代，大空襲を体験し，命からがら終戦を迎えたという。当時は，餓えた人々や駅に寝ころがる浮浪児に脅えながら，女学校に通ったとのことである。この母親の戦争体験は今なお彼女の記憶に強烈な印象を残しており，「異常なほど生命の尊さを考えさせてくれた」と述懐している。光男はそのため，「狂しく愛しく」育てられるところとなったという。

光男は乳幼児期を東京の会社社宅で送った。父方の祖父母の家にしばしば出入りし，おおいに可愛いがられている。この頃から光男はすでに神経過敏の体質的傾向を示していた。注)スプーンを口にしてしばしば呕吐したり，自分の家のトイレ以外絶対使用しないといったエピソードがある。

光男が小学校に入学した年に，父親の栄転で一家はある地方都市に転居し，彼は地元の小学校へ入った。小学4年生の時に，父親は会社を辞し，独立して自分の会社を経営することになる。母親も長男である光男も家内労働を共にしたという。

しかし，その翌年に登校拒否が始まった。父母が朝，光男らをおいて会社に出かけざるを得なかった状況と発症は無関係ではなかったようである。

なお，光男はその頃から著しい肥満化傾向を示し，相談時には100キロほどの巨漢になっていた。また，鼻をクンクンさせるチック症も認められた。

転居後数年経って，光男の憧憬ともいうべくしてなついていた祖父が亡くなった。光男は，その形見でありシンボルでもあった家宝の軍刀を時折，密かにぬいてはながめていたのだった。

注）精神生理学的研究によると，登校拒否児にはパブロフのいう第Ⅳの神経系（神経の弱い型）に属する者が多いという報告もある。

4. かかわりの経緯

さきにも述べたように，高校1年の留年が決定して，1カ月間だけは再び1年生としてやり直したが，新1年生とささいなトラブルを起こしたのを機に，彼は自室に閉じこもり，昼夜逆転した生活を送るようになった。5月の連休あけには，父親が流血するほどの暴力をふるい，手のつけられない状態にあった。思いあまった父親は，出身大学の同窓生で，筆者の知りあいの大学教師に実情を訴えた。その大学教師の紹介で，筆者が「家庭教師」をひきうけ，光男の家に入り込むところとなった。

以下の記録は，約11カ月間にわたった光男とその家族との治療的かかわりを記したものの中から，イヴェントといえる日を選んで記載したものである。

5月19日

苦労して築いた財産とはいえ，かなりぜいたくな暮しぶりの家に入ると，母親が淡々と光男の現状と過去の生育史を話してくれた。その表情はいかにも事務的で，新しくやってきた家庭教師の闘志をふるいたたせるようなものではなかった。話の内容は次のようである。すなわち，権威のある人，たとえば「先生」とか，金持ちには縮こまりこそすれ，家庭教師といえども手を出すことはないであろうということ（ただし，前の担任教師に対しては「殺してやる」と叫んでいるそうである）。将来，防衛大学に入り，自衛隊の幹部になりたいと考えていること，家族に暴力をふるうが，元来，小心者で集金人などにはたいてい愛想がよい，等々のことが明らかになった。

この日の夕刻，父親が早く帰宅して早速，家庭教師料を決める段になった。父親は相場を聞くなり，あたかも商品取り引きのごとくにすばやく指を突き出してその額を無言のままさし示した。

当分の間，妹たちの学習指導をしながら様子を伺うことにし，週3回，夜宅訪することになった。

光男は2階の北側の自室に閉居していた。昼間，家族が誰一人おらぬ時に，食料など必要な物は運び込まれていた。次女るり子の部屋は光男の部屋の向い側にあった。るり子の話では，光男は自室でテレビを見，『平凡パンチ』や『プレイボーイ』などの週刊誌を見て過しているらしかった。

5月30日

父親の帰宅の遅いのをみはからって，自室から出てきた光男は，夕食後の洋間で，ひとりテレビを見ていた。筆者が思い切ってドアを開けて入り，「やあ今晩は，る

り子ちゃんの先生の……」と自己紹介を兼ねたあいさつをすると，光男は，横目でジロリと見つめ，軽く会釈した。当然のことながら，光男は筆者を妹の家庭教師と思い込んでいるふうであった。

6月30日

初対面後ちょうど1カ月にして光男の部屋に入室することができた。この家族はすべての人がベッドで寝ていたが，光男もゆったりとしたベッドを部屋の隈に置き，テレビと本棚を持っていた。ドアがうち開きなのでベッドをドアにあてがえば，そのまま籠城できるというわけであった。

本棚には，漫画本や写真集，教科書，参考書などが無雑作に並べてあった。それらに混って，フランクルの『夜と霧』（みすず書房刊）がポツンと置かれていたのが何とも不似合いで印象的であった。フランクルというのは自分が最も関心を寄せている心の医者のひとりであることや，光男の今の窮状に同情を示して，ものの15分もたたないうちに退室した。

この時の自慰の後始末と思われるチリ紙の乱雑な散らかりぶりと染みついた精液の匂いが部屋中に満ちていたのは後々まで続いた情景であった。

7月2日

光男と面談。彼はひたすら進路問題に悩んでいた。「学校が悪いんだよなあ，畜生！　火をつけてやりてえ……」などと悪罵を投げつけることしきりであった。「考えれば考えるほど，親父とおふくろと学校が悪いと思えてくる」と大きな鼻息とも溜息ともつかぬものを何回も吐いていた。彼はひっきりなしに貧乏ゆすりで巨体を揺がし鼻をチック様にピクピクさせて焦燥していた。

光男：転校してえなあ，だけどまた1年つうのはやあなんだよな俺…。絶対にいやだ。
筆者：どうして？
光男：かっこ悪い，外聞悪い。
筆者：外聞ねえ，でもなぜ2年からならまた学校に行ってもいいと思うの？
光男：あと3年も学校にいるのはいやだから。学校はやだけど高校卒の資格は欲しいんだよ。だいいち防衛大に入りたい。

そのあと，帰宅した父親と話をし，筆者は初めて光男の内面に触れえたという印象を伝えた。父親は，「息子は気が狂っているとしか思えない，精神病ではないか」と，いつになく深刻な表情で話すので，筆者は「そんなことはないと思う」と否定した。

7月5日

るり子の学習をみていると，光男は「ひとりでブラブラしているのはあきる」と言って部屋をのぞきに来る。「君もやらんか？」と誘うと，割合簡単に「ウン」と乗り気になって答えた。少しやってみても良いという気持になってきているようだった。

7月7日

ところが，今夜は光男自身の指導をと考えて宅訪すると，前夜妹をなぐる蹴るの乱暴で泣かせ，大いに暴れたというのである。母親がいうには一昨日の約束が光男にはとても苦痛であったのだろうということであった。自室に閉じこもったままであったので，声もかけずに妹の部屋に入った。この後，暴力はしばしば続いた。接近するには早すぎたように思われた。「勉強」はまさにphobiaの対象であった。「毎週土曜の夜は君の番だぞ」と約束したのは彼にとっては大変なことであった。初め何ゆえか理解しかねたのであるが，光男は土曜になると父母の会社へ，午前中だけで10回も電話をかけるという状態が，その後しばらく続いたのであった。「飯は！」「金は！」というふうにやれ何はどこだと，彼は大変な不安と興奮を示した。そのため家族の者はすっかり疲れ果ててしまうのであった。

7月10日

外から日中，電話をして，とにかく一度外出してみてはどうかと誘ってみたところ，3カ月ぶりに外へ出ることになった。ふたりでサイクリングを楽しみ，郊外の喫茶店でアイスクリームとスパゲッティを食べたが，彼の外での行動はおどおどして，おとなしかった。やっとの思いで第一関門を突破したかという想いであった。

8月5日

光男の最も得意とする水泳に連れていこうと以前から何度か誘っていたが，この日の猛暑に耐えきれず，ついに了解を得ることができた。彼はお相撲さんのような身体で泳いでいたが，筆者が考える程には肉体的コンプレックスを表わしていなかった。若い女性のビキニ姿が気になって仕方がないその一方で，妙に照れていたのが可愛げであった。このプールに誘った前夜，父親は傍で新聞を読みながら，やおら「先生，こいつのはでっかい身体しやがって，ポチョンとくっついてるってえ感じですから見てやって下さいよ，あっはっは……」と光男がそばでテレビを見ているのにもかかわらず，大きな声を張り

あげたのだった。

プールからの帰途，たまたま大学の後輩の女子学生に出会ってあいさつすると，光男は「ねえ，今のひと，先生の恋人？」と真顔で唐突に尋ねたあどけなさは，いかにも光男らしかった。

8月8，9日

先日プールへ連れて行って以来，光男は暑さに悲鳴をあげて「海へ行きてえなあ」と連発していた。筆者は母親と相談のうえ，太平洋岸のある海水浴場へ2泊旅行を計画し，旅立った。友人が勤務している精神薄弱者の施設で第1日目を過した。重い障害者と彼を一諸の風呂に入れ，指導員の介助をさせた。食堂では光男はお茶を飲んだだけで，食事には手をつけず，よくあることと平気な顔の指導員を前にしつつ，縮こまっていた。ひどく匂いに敏感な光男が，施設特有の臭気に無関心でいられるわけがなかった。夜になって2～3キロ離れた村里の店屋から大好きなコーラとパンを買ってきて腹ごしらえをしていた。今日の不愉快な体験も明日の海水浴のためだと辛抱しているかのように，彼はおとなしくしていた。

翌朝，テント一式を施設から借りて張り，十分に海水浴を楽しんで，夕暮れにふたりでカレーライスを作り，飯ごうでごはんを炊いた。後片付けが終わるころから，雨が降り出したので，ラジオに耳を傾けながらいろいろと話をしていたのであったが，だんだんとひどい雨になり，暴風が吹き荒れだした。夜半に至って，雷鳴が浜を揺り動かし，稲妻が沖あいに光り，強い嵐の中でついにテントも吹き飛び，われわれは全身ずぶ濡れになって，暗闇の松林の中でぶるぶる震えながら夜を明かすはめになった。光男は思いがけぬ大自然の襲撃にあって，「ねえ先生，どうする？どうする？」を連発していた。

嵐の夜が明けて，ほんの少しだけまどろむと，光男は「特急で早くうちに帰って，風呂に入って，うまいものたらふく食って，ベッドに入って，テレビ見て寝るっ！」と言い放って，さっさと帰ってしまったのであった。筆者はずぶ濡れのテントを洗って干し，全身の疲労感と失敗感を引きずって，各駅停車で帰途についた。

8月16日

ちょうどお盆休みのさ中，母親が猛暑による過労で入院することになった。光男はそのためイライラのし通しで，妹たちに母の不在のやつあたりをしていた。筆者の宅訪にはほとんど関心を示さなかった。

8月18日

母親は退院していた。妹の学習指導をしていると，向い側の部屋から光男がこっそりと階下に服を着て降りていくので，どうしたのかと気にとめていると，しばらくたって，彼は紙袋の包みを携えて戻って来た。後で寄ってみると，それはポルノ雑誌で，まったく隠そうともせずに，「先生見る？」と渡した。筆者の方が一瞬とまどうような内容で，光男の性に対する〝common sense〟が理解しかねた。彼にとってはただ，「高校生だということがばれたら恐い」ということだけが問題であった。

8月20日

夕方，宅訪すると，彼は妹るり子におつかいを強制していた。

光男：アイスクリーム買ってこいっ，るり子！いいか10数えるうちに行けよ！

るり子：いやだもん！

光男：今何て俺が言ったか聞こえただろう！　10数えるだけだって言ったよな。いいな，身体で思い知らせるぞ。1, 2, 3, 4……10

るり子：いやだ，もう……（と泣き声になる。何度も体験ずみのことなのだ。）

光男はかなりの暴力をふるった。ひどい殴り方だった。その夜，父親と光男と3人で進路問題を話しあった。元の高校の担任と打ち合わせた結果，現状の学力，成績ではとうてい転校も不可能であること，もう一度，高一生としてやり直すかどうかの瀬戸際だということ，これらの事自体，光男の責任なのだということを父親と筆者は強く説教した。光男は興奮しつつ，いいはなった。

光男：だいたい親父が悪い。6月の時点でうんと低いレベルの高校に移せばよかったじゃねえかあ。あの時，捜さなかったから，こじれたんだぞ。

父親：ほんとにお前って奴は！自分の責任というものを感じていない。何でも人のせいにする。だいたい物にぶつかって，そこにあるのが悪いって投げつける奴だから，まったく…！

光男：親父なあ！俺はこうやって一生親父にひっついて，何もしないで財産喰いつぶしてやるから，覚えてろよ！

あわやまた，格闘流血かと血の気もひく思いであったが，その夜は何事もなかった。光男が「うんと低いレベルの高校」と語調を強めた時には，表情までいかにもさげすんだ言い方になっており，彼が学校格差に実に敏感に反応しているのが伺われた。

9月初旬

原付バイクの免許をとりたいというので，筆者も一緒に挑戦することになり，早速，法規の学習を始めたが，試験日が近づくと，彼は来月にしようと言い出した。困難なことはいつも先に延ばそうとする光男であった。

9月18日

自転車に乗って外出したり，犬の散歩に連れて行くようになっていた光男であったが，この日は，自転車のチェーンがはずれて，いじっているうちに興奮しだし，憤って妹たちに激しく乱暴した。仲裁に入った母親もイスで殴られ，生傷をおった。父親がいないのに，こうまでひどい暴力をふるったのは珍しいことであったので，母親はしょげかえっていた。この事件後，光男は2週間程，自室に籠ってしまった。

10月3日

筆者は，偶然知人のつてで，防衛大学を中退していたある大学生に会うことができた。そして事情を話して一緒に白昼，光男を訪れた。元防大の学生は，アルバムやその他の資料を持参して懇切に実情を説明し，光男の質問にも答えてくれた。憧れの大学に関係した人に会った光男は，その後しかし，防衛大学がまったくかえって遠い彼方にあることを知りえたようであった。

光男はその後も現実的には何ひとつ動き出すこともせず，テレビとポルノ雑誌や漫画をみて，性的欲望の処理をしているだけであった。彼はものさしを持って厚い脂肪で無感覚になった腹部をピシャピシャ叩きながら家の中を歩きまわり，気に入らぬことがあると妹をなぐって泣かすのが常だった。またも，家族中がイライラして，出口のない生活を強いられていた。威圧することで君臨していた父親も，年をとった自分はもはや光男と格闘すれば自分の方がやられると，筆者に向かって溜息をついた。母親は依然胃痛に苦しんでいた。

出口なしの重苦しい空気が漂っていたが，母親は以前から予定していた海外小旅行に出かけた。またこの頃，彼女は週末を過すためのセカンドハウスをある山麓に求め，週末をそこで過したいと期待をこめて筆者に度々語っていた。過重な労働と疲弊しきった家庭生活のささやかな代償としての別荘。そこには，温泉が引かれているという。

「あんたみたいな子どもと一諸に生活していたら，お母さん，身体まいっちゃうでしょ，温泉にでものんびりつかりたいのよ！」と光男に冷たく吐き捨てるように言い放つ母親であった。

10月中旬

筆者としては，光男の状態が思わしくないこと，それにともなって，家族がひどく重苦しい空気の中で生活していることを負担と感じていた。個人的なストレスも加わって，筆者は軽い胃かい瘍になってしまい，療養のために2カ月間帰省することにしたのであった。

12月8日

帰省中，光男や妹らに手紙をしたためたが，返事は母親と次女からのものだけであった。

戻ってしばらくの間は長女の期末試験勉強の指導をした。帰省中に読んでいたロジャースの接近法，人間理解などを頭に思い浮かべつつ，このへんで片をつけねばならないと焦り始めていた。

昼の間は光男ひとりが家にいるので，思いきって訪れてみることにした。突然の訪問に彼は驚いていたが，じっくりと話をすることができた。筆者が自宅療養中にいろいろ悩み苦しんだこと，病気のこととこれからの自分の生活設計のこと，「浪人中」であることは光男と同様の宙ぶらりんの不安定さだということ，したがって必ずしも明るい未来が見えているわけではないということ，これらのことを光男はじっくりと聞いてくれた。

筆者：ぼくももう追いこみをかけないと，とても道が拓けないんだ。光男君はこれからどうするの？

光男：高2から入れてくれるっていうなら，やり直してもいいけどさあ。どっかそういう高校，東京かどっかにないかなあ。

筆者：話がうますぎるよ，うますぎる……。少し勉強しないか？　頭ばかになっているんでしょ？　何か道具持ってきてごらん。

このように学習を促すと，驚いたことに，比較的好きだという数学の教科書を持ってきて，近視の眼鏡をかけてノートを開いたのであった。しかし，とても高校の教科書では手がつけられず，中学の教科書を捜しにやったのであった。学力はおよそ中学1年生程度であったろうか。とくに，英語はアルファベットから始めなければならなかった。

しかし，全く予期に反して，光男が眼鏡をかけ，ノートにA，B，C，D…とアルファベットを綴る学習が始まったのであった。

12月30日

年の瀬も迫ったその夜，光男は家庭教師料を貰い忘れた筆者の後を追って，筆者の下宿を訪れた。豪華なベッ

トのある光男の部屋に比べると，いかにも殺風景な筆者の部屋の中に坐り，彼は縮こまってそわそわしていたが，何の話もしないまま，数分後に帰っていった。

1月上旬

正月があけて，光男も両親もさすがにあわて始め，県下の私立高校の実情を調べていたようであった。光男自身には内的な変化が確実に見え始めていた。筆者と光男はふたりで食事を作り，それを共にした。そして多くのことを語りあった。

光男：先生よおー，俺さあ…，つくづく考えてんだけど……，なんつうかなあ……最近しみじみ考えてんだけど……

などと，感情体験を的確に表現しつつ，心の内を語り，筆者に判断を求めるようになっていた。なかでも過去をふり返って，なにゆえ小学校5年のときに，学校が厭になっていったのかを表現してくれたのは心に残る。

光男：親父もお袋も会社つくって忙しかったから，朝早く俺たち置いて出て行くじゃん。俺は妹と一緒に錠かけて出て行くじゃん，だけどまた開けて戻って来るんだよね。腹痛くなるような感じになるんだから，ほんとに。日曜日になると仕事手伝わされたしさ…。

筆者：お父さんだって，会社うまくゆくまでは苦労したろ？

光男：オヤジはさあ，いつも自分勝手なんだよね。なんかっていうと，お前はしっかりせえ，しっかりせえってさあ……。

筆者：なぜあんなにけんかするの，お父さんと？

光男：自分でもわかんないんだよね，全然。言いあいしていてカーッとなるとガラス，バリンだから。

この頃，光男と筆者はまさに「せっぱつまった」状況を共に感じながら，週に3日，ふたりで勉強したりお茶を飲んで過ごしていた。光男の現実知覚はすすみ，確かなものとなって，テレビのニュースにコメントをつけるまでになっていたし，母と妹への暴力ももはや消え失せていた。「妹を殴っても仕方がない」と彼はいった。

2月下旬

受験の時期も残すところわずかとなり，家庭教師の任をひとまず降りることになった。そして，進学の為の受験をした筆者は再び不合格となり，自分自身が人生の岐路に立たされることになった。

光男の父親はこの時期にいたって，またもや金を使って根まわしすることになった。某保守党代議士の仲介で，東京の某私立大学附属高校に1年生として裏口入学することになったのである。

3月下旬

今までの生活を捨てて，新規まき直しをはからねばならないふたりであった。裏口入学とはいえ，家を離れることで，自分の街から出て行くことで，「なんとかなるんじゃないかなあ」と光男ははにかみながら言った。お互いは新しく再生することを誓いあった。

母親はひとまず決着がついたことで安堵感を示しながらも，都会で非行に走らないかとか，気の短い子どもだから心配だとかともらしていた。筆者は，しかし光男は充分に変ってきているから，信じてみてはどうかと伝えた。

わかれぎわに，母親は到来物の洋酒をとり出し，筆者に渡した。あまりにも無雑作な最後の「御礼」ではあった。

5. その後の経過

その翌年の正月に電話をしたところ，でてきた光男は「アパートにひとりでいると，学校に行くしかないと思った，学校の友達は何かあったらしい自分の過去など詮索しなかった。このぶんだと皆勤賞が貰えるかも知れない」と語った。

その4年後の年賀葉書の文面によると，何と彼は大学生になっていた。もっとも，今度も裏口入学であったか否かは定かではない。

Ⅲ 考　察

1. 思春期登校拒否症と臨床的接近法

7年間にわたった登校拒否症のセヴンティーンとの，約1年間の治療的援助関係をふり返ってみると，まず接近上の特殊性について考察しておかなければならないことに気づく。

治療関係，援助形態の型は，幾つか考えられているが（梅垣 1978，1979），状態が深刻である場合には，来談面接が可能である事例は極めて少なく，また宅訪によっても必ずしも良い結果がえられるとは限っていない。

本例では，治療的援助の必要を感じて接近し，直接的に関与することを通してひとりの青年に人格変容をもたらしたという事実において，家庭教師は一般的なその役割をはるかに超えて，“臨床的教師”もしくは結果的に，はからずも“思春期患者の治療者”の任を果たしたことになる。接近のはなはだ困難な思春期登校拒否者に対して，未熟ながらも“臨床的教師”として家庭教師を努め

ることで，意外な成績をおさめた一例といえるであろう。

中井久夫（1978）は，思春期患者には治療においてルール違反をしなければ前に進めないことが多いということ，それもルール違反と知りつつであって，知らずに侵せば結果ははるかに不毛となることを指摘している。このような意味においては，光男とその家族と，筆者との関与の経過は，何のルールもない危険極まりないものであったということができる。みようことか，関与し始めてより約半年経った後には，筆者自身が病いをひきうけてしまった。Binswanger，L.（1947）が，「人間がつねになんらかの仕方でからだで生きている，というだけではなく，人間はいつもなんらかの仕方でからだで語り，あるいはからだで自分を表現する」と述べるように，この病いは思春期患者を育んだ家庭の雰囲気に身をさらした「治療者」自身の身のもがきとしての病いに他ならなかった。「からだで自分を表現する」ことを強いられるような治療関係が，いわば無自覚的に家庭教師に宿命として与えられていたのであった。

光男の家庭教師としていきなり接近するのではなく，妹たちの家庭教師として接触した期間が長く続いた。この期間は，両親と光男の直接的対面を避けるために，中立地帯をつくっていたことになる。両親はひとまず処遇を家庭教師に託していたからである。光男にとっては，実に意義深い“自己内閉”としての籠城をしていたことになるが，この期間に内的な何かをキープしていたと思われる。彼は17年目にして初めて，絶対的君主からの侵略を防衛的に闘かわんとしていたのだということができる。この時期は，“自己内閉”のための時空間を保障することが不可欠の発達課題であったし，この“内空間”の獲得こそ自己確立の第一歩であった。光男の閉じ込もり，自室への頑固な閉居は後にも一度あったが，まことに，「沈黙は精神のための自然な土台である」というPicard，M.（1948）の至言を想い起こさせるだけの価値がある。

われわれはさきに（田畑ほか 1979），“籠る”ということ，あるいは“自己内閉”の意義を積極的にとりあげつつ，青年の自己確立を論じたが，光男の例においても，その重要性が再び浮かびあがる。

海浜での嵐の夜の体験は，筆者自身にはただただ失敗感と疲労感を残して終ったが，籠城をといたばかりの光男には，強烈な，自己破壊寸前の体験として立ちはだかったように思われた。物理的な危機状況でもあったし，至近距離を越えた他者の接近にたじろいだともいえるものだった。治したい一心での「ルール違反」とも知らずに企図した行為であったが，結果的には，妹の家庭教師というだけの位置からワン・ポジション光男の側へ接近することを可能にしてくれたイヴェントであった。

その夏のイヴェント以後のかかわりでは，生活を共有しながらの「つきあい」が，重要な治療的意義をもっているように思われる。オートバイの免許をとるために勉強し合うことから始まって，光男を育んだ家庭の中でのいちいちの物や言葉の共有は，ふたりの間に安定感を与えつつ具体性をもった多くのものをもたらした。

7年にもわたった登校拒否症であったが，ともかくこのようにして良い結果をもって終結した。通常の臨床的接近法をもってしては，頑固な光男の籠城をとき，新しく学校生活へと導くことはできなかったのではなかろうか。本例では，接近における特殊性がそれを可能にしたように思われる。笠原（1977）が「或る種の人間にとっては適切な時期に適切な人々と適切な仕方で出会うことは案外むつかしいことなのだ」と述べているのは，まことに味わい深い。

2. 思春期登校拒否症と暴力・性

登校拒否症および家庭内暴力の蔓延化は，わが国の青少年問題の中でも極だった勢いをみせている。発生機序に関する考察も多々あるが，いずれも戦後の家族形態の変動という歴史一社会的なアスペクトから見る点では一致している。「父親像の後退」「家庭における中心性の喪失」など，父親の位置を大きな問題としてとりあげているものも多い。内山・深谷（1970）は，幾つかの特徴的な family type のうち，父親専制型の家族での登校拒否症出現を強調している。専制型の父親との間に同一視関係が成立せず，一方母親が干渉的であるとき，症状の出現率は高いと予想されている。

光男の父親は，実質的に今尚「日本帝国軍人」といえるような人である。行動力に富み，いつも決断し，自信に満ち溢れ，他者に自分を押しつける。その一方で，「軍人は小児に近いものである」（『侏儒の言葉』）と揶揄した芥川龍之介の言葉を彷彿とさせる人格の人であった。母親は，家庭の問題を「主人」には関係させないための気遣いをしつつ，胃痛に苦しんでいた。田中ら（1966）は，学校恐怖症の家族研究において，問題となっている父親像がその親たる祖父母の存在と無関係でないことを指摘している。光男の家に掲げられた祖父母の遺影は，この家が保たなければならない威厳そのものであった。光男は，ひとり軍刀を抜いて，その光り放つ“力”に魅せられ，父親の暴君的行動だけを憧憬すべき祖父の職業的栄光と重ねて取り入れていた。

侵略的で干渉しすぎた両親のもとに育った光男は，ひとりで判断することができず，「どうする？ ねえ，どうす

る？」と，力のある依存対象の出現を期待するだけの子どもだった。自分で行動したことのない光男は，確かな安全保障感覚をもたない。「美味いものを喰って，テレビを見て寝る」こと以外確かな手ごたえを手にすることができないでいた。

けれども，17歳になって，流血の暴力をもってする父親への反抗が決定的に起こった。家族を殴り，父親を傷つけることで，光男はあたかも初めて「自己」の感触を得たかのようであった。

籠城の間に，両親との距離をとり，沈黙するという以外に，光男は内的な何をキープしていたのであろうか。光男の部屋は，決して乱雑に散らかっていたのではなかったが，明らかに自慰行為がくり返されていたのが伺えた。裸女を満載した週刊誌がベッドの上下に置いてあったし，フランクルの『夜と霧』のフォトを眺めては，サディスティックなミリタリズムと，セクシュアルな感覚の極地を，彼は得ていたようであった。「おれは17歳だ。みじめなセブンティーンだ，誕生日おめでとう。誕生日おめでとう。股倉をいじりまわしてあれをやりたまえ……。」（大江健三郎『セブンティーン』）光男は，自瀆と暴力で17歳の自己をかろうじて確めていたにすぎなかったのであろう。

もしもルール違反を犯して光男とつきあい，光男の自己確立の援助をする者が不幸にして現われなかったならば，彼の不全感覚はより拡大し，この家庭はより破壊的な power operation に長きにわたって苦しめられ，悲惨な結末を見せていたかも知れない。

先の中井久夫は，「登校拒否がいまは前景に立っているようにみえるが，遠からず思春期強迫症がこれに並ぶであろう」と指摘し，現代の思春期強迫症に深い安全保障喪失感が露わになっていることを述べている。「不安は自由のめまいである」とは，19世紀の Kierkegaard の警告にも似た辞であったが，現代の思春期は与えられた見せかけの自由にめまいをおこして，立ちくらんでいるかのようにみえる。光男がはからずも興奮して言い放ったように，美食やテレビを見ること，そして暴力やセックスへの関心だけが一瞬間，立ちくらみから救ってくれているかのようである。

光男の『夜と霧』への関心は，現代の思春期の姿を暗示しているのであろうか。暴走族の少年達が，ナチスの鉤十字を紋章にして，鉄の規律で夜の大都会を走りまわっている。彼らの中には必ず女子が入っている。Fromm, E.（1941）は述べている。「人間が自由となればなるほど，そしてまたかれがますます個人となればなるほど，人間に残された道は，愛や生産的な仕事の自発性の中で外界と結ばれるか，でなければ，自由や個人的自我の統一性を破壊するような絆によって一種の安定感を求めるか，どちらかだ」と。

周知のように，Frommは1930年代のナチス・ヒトラーによるファシズムの台頭を，心理一社会的に考察し，「自由の重荷からのがれて新しい依存と従属を求めるか，あるいは人間の独自性と個性とにもとづいた積極的な自由の完全な実現に進むかの二者択一」が迫まられていると述べて，全体主義がなぜ自由から逃避しようとするのかを分析している。光男たち現代の思春期患者だけでなく，多くの登校拒否症予備軍にも共通してみられる自己不全感覚，安全保障感覚喪失感。それゆえに，「無気力学生」と「家庭内暴力」といった二極構造を示している現実がある。

国家主義と能力主義の教育政策が続き，受験戦争が長期にわたって青少年を威圧している以上，そしてまた彼らが愛や生産的な仕事の自発性の中で外界と結ばれているという感覚を持ちえていない以上，次の時代には個々の臨床家では扱いきれない重大な問題に発展しかねない状況が，今つくられていることを認識せざるをえないのではないだろうか。（間宮）

IV　論評 1.　出合いにおける無自覚性の克服について

本症例報告の特徴は，治療者が未だ専門家としての訓練を受ける以前の段階にあったが，それがかえって，心理臨床の場における出合いの意味をナイーヴに鮮明化している点にある。とくに治療的援助の過程で治療者自身が自己の内包する問題に気付かされること，いわば出合いにおける自覚性について考えさせられることが多い。

まず治療形態であるが，本報告にみられるような治療形態を明確に言語化することは少しく困難なことであるという印象をうける。治療者でもある著者は考察の中で「臨床的教師」と表現しているが，筆者にはいまひとつピンとこないものが残る。では治療者のかかわりが“治療的”ではなかたのかというと，立派に「思春期患者の治療者」にはなっているのである。

治療者ははじめ家庭教師（それも妹の家庭教師）というふれ込みで症児に接近しようとする。そして約一カ月間妹の家庭教師に専念した後で症児との本格的な接触をはじめている。本症例の治療形態には，治療室という場所的設定もなければ治療者としての役割の明確化もなされていない。このふたつは治療状況を外側から支える一種の枠組みとなるものであり，このような枠組みは治療に明確な方向づけをあたえることができる点から非常に

大切な条件なのであるが，本症例の治療状況にははじめからこの両者が欠落しているのである。それならある特定の専門家がおこなっている治療の補助手段的役割に徹しているのかというと，そうではなく治療者は何もかも引き受けようとしているかのようである。治療者は症児の妹の家庭教師でもあり，症児の家庭教師でもあり，家族面接者としても機能しながら，次第次第に症児とのかかわりを深めてゆく。いわば治療者は症児とその家族に対して七変化も八変化もし阿修羅のごとく大活躍するのである。正確を期していえば，治療者は少なくともそうあろうと努力しつつ頑張っていたようである。このような治療者は症児にとってどんな姿に映っていたのだろう。妹の家庭教師？自分の家庭教師？親切な兄貴的人物？救いの神？etc，etc。そのすべてであったようでもあるし，そのいずれでもない一種いわくいい難い人物であったようでもある。しかし，すくなくともこの治療者にはわれわれの堕りやすい“治療者的万能感”はなかったようである。それが救いになっている。

このような治療者のありかたは専門的見地からすれば奇怪なものと感じられるかもしれない。このような治療形態のなかで，治療状況は「喫茶店」「水泳」「キャンプ」など無原則的にかつ飛躍的に外へ外へと拡張してゆくのである。しかし，経過から見る限りでは，かえってそれが効を奏しているようであり，極めて治療的に見えてくるところが本症例報告の不思議なところなのである。では治療経過に立ち入って見てゆくことにしよう。

家庭教師として症児の家へ治療者が入り込んでから約一カ月もすると，症児は自分の部屋へ治療者を入れてくれるようになる。そして治療者が妹の勉強を見てやっている部屋を症児はなにげない素振で覗いてゆくようになる。これは症児の心の窓が治療者に対して開き始め，ラポールがつきはじめたことの証しである。治療者は症児を勉強に誘い，案外症児は素直にそれに乗る。そして症児との勉強の日を決めるのだが，その約束の前日になると症児は妹に乱暴したりして荒れはじめ，父母のもとへしつこく電話したりする行為が治療者の宅訪の時までつづくのである。それに対して治療者は「勉強が phobia の対象になっていた」と理解し「声もかけずに妹の部屋へ入って」いったと記しているが，この点はどうだったのであろう。もし勉強が phobia の対象であったなら，それを持って来る先生（治療者）はもっと恐ろしい人物となるはずなのに，治療者からの外への呼び出しには案外簡単に応じている症児の姿を見ると，どうも真相は別のあたりにあったふしが感じられる。そしてこれがじつは先ほど述べた“治療者像の明確化”とつながってゆく問題なのである。治療者は症児にとって敵なのか味方なのか。どうもこのあたりで症児は混乱していたようだ。治療者が妹―両親―症児の間でゆれうごいている，そんな印象がこのあたりではする。さらにいえば，ひょっとすると症児は真実を知っていたのかもしれない。つまり彼（治療者）は自分（症児）のために家へやってきた人であるということを。治療者が本当は自分の味方なのかもしれないということを。多分に権威的で干渉的であったとされる両親がこの事実を症児に向って一度も口にしなかったとはちょっと考えにくい。もしこの仮説が成立するとするとどうだろう。“ウソだ，ウソだ。みんな自分にウソをついている。彼（治療者）も正直じゃない。”こんな風に症児は思わなかっただろうか。妹はどんな姿で彼（症児）の眼に映っただろう。“大切なものをまた奪いかねないにくたらしい競争者”という風に妹が見えていたかもしれない。このあたりの事を治療者はどうお考えになるか。父母に対して電話で（直接にではない）「飯は！」「金は！」と要求しつづけるやゝ退行した症児の姿には，症児の悲痛な精神的飢餓感が感じとれはしないだろうか。

この時点で治療者は「勉強」という通路――やゝ堅めのおいしくない食物――の提供をあきらめて，今少し口あたりのよいおいしい食物を提供しようとしはじめる。「喫茶店での語らい」がそれであり，首尾よく症児は家の外へさそい出される。大成功，大成功。しかし一度外へ拡張しはじめた治療空間は加速度的に拡がりはじめる。えてしてこうなりやすいものだ。治療者が考察のなかでのべているように「何のルールもない危険極まりない」治療状況が現出する。転移―逆転移の嵐が吹きあれ，症児は混乱し，症状は悪化し，治療そのものが何をやっているのかわからないような収集のつかない混乱へと転落してゆく。ところが本症例の場合そうはならなかったのである。では何が起ったのか。“神風”が吹いたのである。天佑といおうか，本当の嵐がキャンプでの二人の夜を押しつつんだのである。二人の間が荒れるかわりに，二人をつつむ外の自然が猛烈に荒れたのである。筆者にはこのあたりの経過がなにか偶然の一致をはるかにこえた，“意味ある一致”あるいは自然的布置（constelation）と思われてしかたない。闇と雷光と風雨のなかで二人はどんな体験（心理的に）をしたのだろう。とりわけ症児にとってこの一夜はどんな意味のある体験となったのか。おそらく余人の想像を越えた濃密な一夜となったことは確かであろうが，筆者にはこんなイメージが見えてくる。“互に性質のことなる二種の化学物質がレトルトの闇のなかにとじこめられる。化学物質は自然の揺籃のなかで撹拌され，加熱されたり冷やされたりしている。”

そこで化学物質の相互反応とあらたな化学物質の生成

は可能となったか。もちろんここでいう化学物質とは治療者と症児の比喩であり，レトルトとは大自然の闇と嵐である。著者の記述からすると“化学変化”は生じなかったかのようにもみえる。翌朝，症児は「特急で早くうちに帰って，風呂に入ってうまいものたらふく喰ってベッドに入ってテレビ見てねる！」といってさっさと特急で帰っていってしまう。それにひきくらべ治療者は「失敗感と無力感をひきずりながら」各駅停車で後から帰ってゆくのであるが，その姿はなんとも痛ましい。

“化学変化”は本当に生じなかったのか。生じなかったと見るのは多分に皮層的な見方であるのかもしれない。そう思えるのは，この夜のありかたが一種の極限状況であり，少なくとも“共に危険を体験した”ということができるからである。ここで治療状況は次の段階に入ってゆく。

症児にはさしたる外面的変化はみられず，「家族中がイライラした出口のない生活」の状態となる。母親は胃痛に苦しみ，別荘に温泉をひいてそこへ出かけてしまう。治療者自身も症児の母親と同じような身体症状（胃潰瘍）をおこし療養のためと称して帰省してしまう。“ひとまず退散”である。しかしそんな状況になる直前に，治療者は面白い人物を症児に紹介している。防衛大中退の学生である。この人物をどんな目的（ねらい）をもって症児に紹介したのか，そこで三人をまじえてどんな雰囲気でどんな事が話しあわれたのか論文には記されていない。しかし筆者には，症児にとって見ず知らずの人物が防衛大中退の学生であったというあたりが極めて重要な意味を持っていたと思えてくる。防衛大は（軍人を ideal ego としていた症児にとって）たぶん白日のように輝く聖域であったろう。そんな彼の前に防衛大中退生があらわれたのである。何が語りあわれたのかわからない。受験上のこころえなども語られたのだろう。防衛大のありのままの姿が“防衛大中退生”の口から語られたのかもしれない。少なくともこの時点で，症児の聖域は陰影をそなえた現実の姿でもって見えるようになったのではないだろうか。いわば症児の ego ideal の世界に（多分にファンタジーの世界に）現実の世界が侵入してきたのである。ファンタジーは崩れざるを得ない。内面から見るとき，この事態はあらたな危機となる。この頃症児が示していた“荒れ”の状態はこんなふうにみてゆくと意味をもってうかびあがってくる。筆者にはそう見える。このような経過をとうして治療は次の局面へと入ってゆく。

治療者は二カ月ののちに帰省から戻って症児との面接を再開する。そこで治療者は「（症児と）同様の宙ぶらりんの不安定さ」や「（自分の将来も）必ずしも明るい未来が見えているわけでない」ことなど，かなり正直に自分の苦境について症児に語りかけ，その話に対して症児は「じっくり聞いてくれた」と記されている。どちらがセラピストでどちらがクライエントなのかわからないような立場の逆転がここには生じている。こんなふうにみてくると嵐の一夜以後における治療の後半の過程は，治療者自身が本来の意味における“癒し手”になるためのインキューベーションの儀礼を受けていた過程であったようにも見えてくる。治療者は治療者然としたカミシモを脱いで，あたりまえの青年としての（強者としてではなく弱い人間としての）姿を症児のまえにさらけ出す。ひとりの青年の内的外的現実がひとりの少年の内的外的現実とかさなるようになったのである。ここまでのべてくると，本症例の治療のプロセスには，その裏側の秘められた部分に鑪（1978）のいう「同種的葛藤」のプロセスが脈々と流れており，この局面になってやっと河合（1977，1979）のいう「同型的対決」にやゝ近いプロセスへと構造的に変化していったことが明白になってくる。そして，このことがさきに述べた出合いにおける無自覚性からの脱皮につながることなのである。症児はかなり前向きに自分の将来のことを考えたり，これまでの自分のありかたに思いをめぐらしたり，勉強に手を出したり，一種の現実検討能力が育ってくる。治療終結は近い。

治療終結に際して「新しく再生することをお互いが誓い合った。今までの生活を捨てて新規まき直しのふたりである。」こう著者は記している。症児は自分の街と家を出る。―こんな終結もあっていいのだろう。すくなくとも本症例の治療プロセスにはふさわしい“二人の門出”である。

治療経過を筆者なりの観点から再構成することで予定の紙数の大半がつきてしまったようだ。本症例報告は専門家から見ればずいぶん目のあらいすきだらけの報告となっていようし，このかかわりを治療的ではないとする識者もいることだろう。しかし筆者にはなおも本症例の場合のかかわりは治療的であったと感じられるのである。しかし症児やその家族の背負う病理のどこをどうなおしたのかと問われると筆者は？の信号をちらつかせるほかはないし，おそらく治療者自身がそうであろう。ひとことでいうと本症例の治療形態は acting out 型サイコセラピーとでもいいうるのだろうか。ある条件の中である種の出会いがあった場合，このようなセラピィーも可能となるのであろうか。本症例の治療者がこの体験をへて何を得られたのか，あらためてじっくり聞いてみたいものである。また，筆者がとりあつかった治療経過における問題以外にも，例えば本症例の症状形成，診断，家族病理上の問題など，あるいは症児が持っていた『夜と霧』

の象徴的意味あいなど，指摘しなければならない問題点はいくつか残されたが，紙数がつきた。そこで，筆者が発見した『夜と霧』の中の一節を以下に紹介して，治療者ならびに本症例光男君のための献辞のかわりにしたいと思う。

「……一つの未来を，彼自身の未来を信ずることのできなかった人間は収容所で滅亡していった。未来を失うと共に彼はそのよりどころを失い，内的に崩壊し身体的にも心理的にも転落したのであつた。」— 傍点訳者 —（Frankl, V.E., 1947, p 180）　（生越）

V　論評 2.　共通感覚の問題

この症例報告を論評するにあたって，はじめに筆者が「登校拒否」をどのようなものとして捉えているのかについて述べておく必要があろう。臨床実践に対する解釈は，つねにその視角との対応においてはじめて，よく意味をなしうるからである。

「登校拒否」とは無論，ひとつの状態像，症状をさす用語であって，疾患の本質的様態を示す言葉ではない。この本質的様態ということに関して，筆者（田畑ほか，1977）はかつて次のように述べておいた。すなわち「青年期危機は，症状論的には原則的に精神分裂病とは区分して考えられるのが一般的ではあるけれども，基本的な生き方の人間学的類型という視点からするならば，むしろその区別は全く不可能である。要するに，これら様々の青年期危機は，精神分裂病者特有の基本的な生の歩みのありようを把握しさえするならば，そこからすべて充分理解しうるものとなるのであり，この意味では青年期危機はすべて，精神分裂病の様々な程度での不全型とみなしうるのである。」当然のこととして，青年期危機の重要な一角をしめる登校拒否も，この例外とはなりえない。

すなわち，筆者は登校拒否，家庭内暴力，アパシー，強迫神経症，対人恐怖症，思春期やせ症，離人症等々の青年期危機症候群を「"Sichdarleben"（自分を出して生きること，Blankenburg, W., 1971）の問題化」として捉え，その最も重篤な表現形式としての精神分裂病といわゆる正常の範囲における分裂気質および対人恐怖的性格を両極とする連続性の中間に位置づけたいと考えている。従って，従来の診断論的枠組からいえば，「境界例」と重なりあう部分が多い。また，その Sichdarleben の問題化ということの最年少発現型としては，幼児自閉症がそれにあたると考えるが，ここではこの問題には立ち入らない。

この場合の「登校拒否」は，多く神経症的「学校恐怖症」と呼ばれるような，中学低学年以下において発症してくるものとは，一応区別しておいた方がよいであろう。そのような学童期に発症してくる状態は，基本的には「環境に対する抗議」の意味が大きく，いわゆる「情緒障害」の文脈で理解可能となるのに対して，思春期登校拒否においては，そのような意味がみいだされることも少なくはない（ことに女子例に多い）が，問題の重点はしかし，「自己を自己としてあらわすこと」あるいは「自己がどう自己としてありうるか」ということにあり，発達論的，疾病論的に異なった事態となるからである。

「Sichdarleben の問題化」が精神分裂病において最も端的にあらわれてくるといっても，ここでいう精神分裂病とは，あくまでも従来の症候論的規定による概念ではなくて，「現象学的人間学」的に本質規定されたそれのことであることは，再度確認しておかなくてはならない。とりわけ，「自覚的現象学」の立場から木村（1975, 1979）が，精神分裂病の本態を「ノエシス的自己のノエマ的自己への統合のし損ない」という事態のうちにみていることが重要となる。ノエシス的自己とは，未だ自他未分の世界との合一的な純粋経験的側面のことであり，ノエマ的自己とは，対象化され自覚されうる具体的自己のことである。幼児期末，学童期にはいったん潜勢的となっていたノエシス的な動きは，思春期にいたって再び活発となる。それは成熟にともなって自生的にあらわれてくる得体のしれない感覚であり，この時期，同時に開示されてくる性的存在をひきうけねばならないことと，やがて一個の主体的自己として社会のなかへ歩みでていかねばならないこととという課題状況への漠然とした予感のようなものによって，色調を与えられる。この時，ノエマ的自己がそのようなノエシス的な動きにみあった行動をとりうるだけに形成されているならば，その都度の個別化に問題は生じないのであるが，もしそうでなければ，自己の源泉としてのノエシス的な動きをその都度統制し，具現化して現実的に機能するということができなくなってしまう。それが共通感覚の自然さと自明性とから逸脱してしまう場合に，分裂病的存在様式と呼ばれることになるのである。

登校拒否症状をとりうることと，一挙にノエシス的自己優位になってしまう分裂病的症状発現との相違は，ノエマ的な機能的自己の形成のされ方の程度差によるのであって，ともにノエマ的自己が形成不全であることには本質的な相違はない。しかしこの程度差は重要であって，登校拒否的症状形成には，ノエマ的自己の器用な機能が問われる社会的状況を拒否し，そこから退却することによって，一挙にノエシス的自己が優位になってしまう事態を防ぎうるだけの強さがあるわけである。この点，分裂病的症状発現にあっては，発病の結果として不登校に

なったり，退学したりすることにはなっても，積極的に学校状況を拒否することは少ない。たとえ退避し，自室に籠城したとしても，自己に帰属せしめえない自己の根底そのものに対する恐怖と不信はおおいつくせるものではないからである。従って，同じ登校拒否であっても，自室に閉居できないものの方がより重篤であるということができるし，治療論的に「自閉のすすめ」を行うことの根拠が存している。

このようなノエマ的自己の発達の相違は，家族による養育の仕方によって決められる。従来明らかにされてきた登校拒否者の家族のあり方は，分裂病者の家族構造と全く重複するといってよい。要するに，家族の病理として重要となるのは次の点である。すなわち，そもそもこれらの家族自体に共通感覚があまり発達していないために，その中で育つものにノエシス的な動きをその都度どう具現化するかという範例と経験を与えないし，心理的距離の「遠すぎ」と「近すぎ」の共存する圧迫的侵入的状況（池田ほか，1975）の中で，個人が主体的に行動しうる機会を奪ってしまうのである。しかも行動の基準はきわめてノエマ的であり，合理主義的，操作主義的，人為主義的となる。要するに，これらの家族においては，両親自体の病理性が外見上，派出にあらわされることは，それほどないけれども，そこには「虚構の家」的な欺瞞性に満ちた雰囲気が底在しているのであり，両親夫婦の心理的結婚は多くの場合，未完成のままである。

登校拒否者は，退却した空間の中で児戯的な，あるいは短絡的，衝動的な，かなり退行した行動を示す。暴力行為も彼自身，何に対する怒りのためかわからないのであろう。おそらくは自身のノエマ的自己に対する怒りであり，そのようにしかなさしめえなかった両親への怒りと同時に，彼らによって作りだされる圧迫的状況への無理矢離な外的「遠ざけ」のためなのであろう。この時，内的に高い理想を形成することもありうるが，登校拒否自己像論の根本的なあやまりは，相関関係と因果関係をとりちがえた点にある。すなわち，ノエマ的自己の形成不全のため，Verstiegenheit につながる理想像が形成されるのであって，それらの差異が直接，原因または誘因となるわけではないのである。

そのような退行的な状態の中で，象徴的にいえば，彼らはあたかももう一度，自らの不器用なノエマ的自己を再生させようとしているかのようである。

従って，治療的接近としては，ひとまずそのように自閉的になりうる時空間を保証することが重要となる。その中で，一方では親子関係，夫婦関係の病理を調整するための家族療法的関与が必要となり，他方では，彼の日常的経験の巾をひろげ，ノエシス的自己の要請にこたえうるノエマ的自己を再構成することを促すような配慮が必要となるのである。

以上のように登校拒否を捉えたうえで，さきの症例を眺めなおしてみよう。まず，家族状況についてであるが，父親はいわゆる「努力の人」であり，彼のモットーを強いていわせるとするならば，「なせばなる」ということになるであろう。軍人というのは大体，教師や科学者や技術者とならんで，教条主義的，合理主義的でノエマ優位的となりやすく，「達成，遂行」面では往々優れてはいても，共通感覚の豊かさを示しにくい傾向がある。この父親も経営者としては強引なやり手なのであろうが，情緒的には未分化なままである。学歴の面では彼自身，エリート・コースを歩み，その恩恵を充分に利用してきたからこそ，光男にも学歴主義のレールを敷き，押しつけようとした。光男は登校を拒否することによって，父親のその二つの弱点をめがけて，まさに強烈な異議申したてを行ったのであった。

母親もまた，豊かな母性性や共通感覚をもった人とは思えない。「美人」で「お嬢さん育ち」というのは，いつもこの点でのハンディがつきまとう。この母親の行動の端ばしには冷やかさが感じられてならないにもかかわらず，彼女は光男を「狂おしく愛お」しんできたということであり，非常に干渉的であるともいう。また，彼女は家庭の問題を主人に「関係させない」ための気遣いをする人でもある。元来，そのような家庭的な問題は，情緒的には未熟な父親にとっての弱点となるがゆえに，彼女はそうせざるをえなくなったのではあろうが，そこのところに無言のうちに共同謀議された操作主義的な作為性と人為性が感じとられてならないのである。このようにして道具的，操作的に対象化されつつ，しかも「遠さ」と「近さ」の共存する圧倒的状況の中では，そこで育くまれる者が主体的現実的に器用に行動しうるノエマ的自己を充分形成しうるはずのないことは想像にかたくない。

それゆえに，彼は登校拒否への道を歩むことを余儀なくされたのであったが，次にはこの退行的状況の中で示された性と暴力の意味について考えてみることにしたい。筆者はこれらを，治療者がなした考察ほどに深みのあるものではないのであるが，あえてやはりそのままに未分化な短絡的衝動的行為として捉えたいと思う。彼の自慰は，たしかにノエシス的な動きが自己の統制をはなれて拡散的になりそうになる根源的不安を補償するための身体水準での自己確認という性格のものではあろうが，それはあまりに身体的，性器的であって，たまたまであった知人の女子学生について「先生の恋人？」と問うほどの精神的，社会的側面での幼稚さとの乖離こそが問題と

されなくてはならないであろう。暴力もまた，ことに妹に対するそれはいわば「八つ当たり」的なものであって，幼児的なサディズムを充分に感じさせるものとはいえ，精神的，思想的にミリタリズムにつながるようなものとは思えない。祖父と防衛大学への憧憬も verstiegene に獲得された同一視の対象というよりは，狭められた日常的経験の中で，彼の進むべき将来の道として彼はそれしか与えられなかったのである。それゆえに，防衛大学を中退した学生によって，現実をはじめてつきつけられた時，彼はいとも容易にその理想を撤回しえたのではなかろうか。

治療者は Fromm, E. を引用して，現代の若者達が自由のあまりに右翼的全体主義へと傾斜していくことに危惧を表明しているが，それは充分，傾聴に値することではあるけれども，この文脈においては以上の点からして，提起されねばならない問題はそのことよりむしろ，現代のあまりに合理主義的な時代精神にあっては，人が人となりうる自然さが喪失されかかっており，共通感覚が窒息しそうになっているということのうちにこそ存しているのではないだろうか。

最後に，治療的関係について述べておくならば，この時治療者は未だ専門家になる以前であり，何ら専門的技術こそ習得してはいなかったのであるが，何にもまして彼は健全な共通感覚をもちあわせていた。以上に述べてきたことから既に明らかなように，この共通感覚こそが，技術や知識以前に治療者にとっての第一の必須要件となるのである。それゆえに彼は「何とか治ってほしい」というパッションをその胸中にみなぎらせながらも，決して近づきすぎることなく，斜めから彼との関係のうちに入りこんでいくことができた。この点，「ルール」をよくわきまえた，いわゆるベテランの治療者であったとしても，なまじそれゆえにこそ，これほどによく治療者たりえたかどうかは疑問である。

また，両親にとって治療者の存在は，生活の中でのいわばひとつの緩衝帯となりえ，光男との間に距離を保つことができるようになった。そうした中で，治療者は光男を外界へと連れだし，日常的経験の巾をひろげさせつつ，キャンプや元防衛大学生を介して，彼を「現実」に直面させていくことができた。ことにキャンプの嵐の一夜は，重要な意味をもっていた。それは，治療者がいうように「あまりに接近しすぎた他者にたじろいだ」ということでも，あるいは他者との共人間的な出会いが準備されたということでもなくて，おそらく彼はそのような物理的な危機状況の中ではじめて自己自身に，あるいは自己の sein に直面したのであろう。それゆえ，彼は翌朝あわてて，彼にとって親しみうる日常性の中へ帰っていったのであったが，その中で彼はやがて自らの足で歩みださねばならないことを予感したのにちがいない。

分裂病者の入院治療が終った段階において，しかし今一歩の何かが彼らに欠如しているという印象はしばしば語られるところであるが，その何かとは結極のところ，やはり共通感覚というべきものなのであろう。これを治すということは容易なことではないけれども，そのアプローチとしては，いわゆるデイ・ケア的な活動の中で，日常的経験をつみ，治療者が一々のそれを確認し，保証することにおいて，社会的技能を身につけていくという仕方の他にはないと筆者には思われるが，この症例の報告者はまさにそのようなデイ・ケア的接近を一対一の関係の中で実践したのであった。ここで治療者が「つきあい」と「日常生活の共有」ということを強調していることの重要性が確認されなくてはならない。筆者もまた最近，ことにこのような分裂病圏のケースの場合，日常的な次元でつきあい，生活経験の巾を広げていく中で，「現実」に対する実践的な気付きを促すことが大事であることを主張したところである。

このような「つきあい」のうちにあって，この治療者は自身の進路問題や追いつめられた様を卒直に表明し，それをどのようにして乗り越えようとするのかという姿勢をも含めて，彼に一歩先んじて，世界の中へと歩みだす仕方を「垂範的」に示したのであった。このような治療者は，光男にとって生まれてはじめて直面した「他者」であったのにちがいない。　　（池田）

文　献

Binswanger, L. 1947 *Zur phänomenologischen Anthropologie.* Francke, Bern. （荻野恒一ほか訳　1961　現象学的人間学　みすず書房）

Blankenburg, W. 1971 *Der Verlust der natürlichen Selbstverständlichkeit. Ein Beitrag zur psychopathologie symptomarmer Schizophrenien.* Ferdinand Enke, Stuttgart. （木村敏ほか訳　1978　自明性の喪失　みすず書房）

Frankl, V.E. 1947 *Ein psycholog erlebt das Konzentrationslagel.* Verlag für Jugend und Volk, Wien. （霜山徳爾訳　1961　フランクル著作集 1　夜と霧　みすず書房）

Fromm, E. 1941 *Escape from freedom.* New York. （日高六郎訳　1951　自由からの逃走　東京創元新社）

池田博和・村上英治・藤岡新治　1975　精神分裂病における「人間学的均衡」としての距離　名古屋大学教育学部紀要（教育心理学科）**22**, 51—81.

池田博和　刊行予定　青年期危機への現存在分析的接近

村瀬孝雄編「講座　心理臨床の実際　第8巻　青年期危機の心理臨床」に所収　福村出版
笠原　嘉　1977　青年期 ―精神病理学から― 中公新書
河合隼雄　1977　「受容」と「対決」について　臨床心理事例研究　京都大学教育学部心理教育相談室紀要 **4**，164―168.
河合隼雄　1979　逆転移の治療的有効性 ― 鑪さんに答える― 臨床心理事例研究　京都大学教育学部心理教育相談室紀要 **6**，170―174.
木村　敏　1975　分裂病の現象学　弘文堂
木村　敏　1979　共通感覚の喪失　精神分裂病と早期幼児自閉症を中心に　伝統と現代第**58**号に所収　伝統と現代社
中井久夫　1978　思春期患者とその治療者　中井久夫・山中康裕編「思春期の精神病理と治療」に所収　岩崎学術出版社
Picard, M. 1948 *Die Welt des Schweigens.* Eugen Rentsch, Erlenbach – Zürich.（佐野利勝訳　1964　沈黙の世界　みすず書房）
田畑治・生越達美・池田博和・伊藤義美・間宮正幸　1977　臨床青年心理学序説　名古屋大学教育学部紀要（教育心理学科）**24**，85―106.
田畑治・生越達美・間宮正幸・渡辺直登　1979　臨床青年心理学研究（Ⅲ）名古屋大学教育学部紀要（教育心理学科）**26**，55―73.
田中雅文・岡本聡美・十亀史郎　学校恐怖症の家族研究 ―その父親像を中心に―　児童精神医学とその近接領域　**7**，121―131.
鑪幹八郎　1978　『「受容」と「対決」』（河合論文）へのささやかな対決，あるいは幻の中の一人相撲，臨床心理事例研究　京都大学教育学部心理教育相談室紀要　**5**，158―160.
内山喜久雄・深谷和子　1970　登校拒否症の発症における家庭的要因の分析 ―男子の事例を中心に―　教育相談研究　**9**，15―26.
梅垣　弘　1978　登校拒否へのアプローチ ―理解と援助をめぐって― 小児の精神と神経　**18**，17―23.
梅垣　弘　1979　地域における児童精神医療の実践　社会精神医学，**2**，443―452.

（1980年7月31日　受稿）

A STUDY OF ADOLESCENCE IN THE LIGHT OF CLINICAL PSYCHOLOGY (VI)
– A case of long term school refusal and violence in family –

Hirokazu IKEDA, Masayuki MAMIYA, and Tatsumi OGOSHI

Nowadays there are severe situations about school refusals or violences in family in adolescence in our country. Although we have engaged in clinical practices and studies in the light of clinical psychology for these problems, there remains many difficulties in the therapeutic aproach still. And we hardly clarify the essential part of the problems.

In this paper, we reported a case of adolescence who had refused to go to school for seven years and resorted to violence in family at 17 years old. The patient was a high school boy whose father was such as a "militalist" and mother was excessive interfering to him. The report contains the process of therapeutic aproach and some conciderations by two commentators.

The patient named Mitsuo began to refuse to go to school at 10 years for the first time. He repeated the symptoms again and again. At junior high school age, he experienced the life in institution for emotional disturbed children. After first grade in high shcool he slipped back a year, and then began to resorted to power orientation in his family. The violence was very keen to his father. He had been withdrawal after one severe powered night. When one of the writers visited to his family as a home teacher, he was in "siege".

The home teacher started teaching Mitsuoś sisters and approached to him step by step. After the raise Mitsuoś "siege" hardly, the teacher brought him to swimming to pool or the sea with much troubles.

Mitsuo adjusted himself to social life gradually. But he was dull in his daily life. His violence in family continued. He was interested only in pornography.

After a half year since the teacher called on this family at early sommer, he became sick because of much stressed events. Returning from a rest cure, the home teacher could teach him study, strange to say.

Consequently Mitsuo entered a high school by "back enterance" at other place. And although he had many difficulties, he could enter an University.

Our considerations are following.

1) It was a specific style that the therapist was a "clinical teacher as a home teacher". The specific approach made the patient go well.

2) It was first significant step for self-establishment to obtain "self-in-space" for these adolescents. And to hold in common the everydays life was therapeutic meaning.

3) It is a matter of grave concern that a part of adolescents nowadays has a supportive opinion to admire "Sex and Violence".